

アナログな生活

人
物

藤田光（25）会社員

木村佳樹（25）藤田の友人

藤田光（22）会社員

木村佳樹（22）藤田の友人

原田（25）藤田の友人

○渋谷駅前（朝）

時計の針が5時を指している。鳥の
声。朝日。まばらに人が歩いている。
若い男性の5人グループが歩いてい
る。そのうちの一人藤田光（22）が
眠そうに目をこする。

藤田「じゃあ俺、JRだから。またな」

木村佳樹（22）もそれに続く。

木村「あ、俺もJRだわ。じゃあな」

2人と3人に別れる。藤田、木村、JR
の駅の改札に入っていく。

○走っている電車内

藤田、木村並んで椅子に座っている。

木村「お前が来月からあの渡辺商事の社員か
ー。すごいな」

藤田「すぐくねえよ。たまたま運が良くて入
れただけだよ」

木村「運も実力のうちだろ」

藤田 「まあなー。入れたはいいものの、振る
い落とされないように頑張らないとな。

お前もデザイン事務所の就職決まったん
だな」

木村 「まあ、給料はめちゃくちゃ少ないけど
な。好きなこと仕事にできたのはよかつ
たよ」

電車が駅に着く。

藤田 「あ、じゃあ俺ここで乗り換えだから。
大学卒業してもまた集まるうな」

○オフィス内（夜）

広いオフィスに、藤田（25）がひと
りでパソコンに向かって作業をしてい
る。手につけたスマートウォッチを見
る。デジタル時計が示す時間は

02:45。

藤田 「やべえ、今日もこの時間か。はあー」

藤田、エナジードリンクを一口飲んで作業を続ける。スマートウォッチに電話がかかってくる。

藤田「お世話になります。藤田です」

○橋の上（朝）

藤田、下を向いて歩いている。途中で立ち止まる。しばらく下を向いて立ち止まる藤田。吐き気を催し口元をおさえる。道の端でうずくまる。反対側から木村（25）が歩いてくる。うずくまる藤田を見る木村。

木村「藤田？」

藤田、顔を上げる。

藤田「え、木村？」

木村「うえーい久しぶり。大学の卒業式以来か？いや同窓会で会ってるか。まあいや、何してんの？」

藤田「ちよっと気持ち悪くて」

木村「体調悪いの？大丈夫？」

藤田「まあ、しばらく座ってれば大丈夫」

木村、背負っていたリュックからペットボトルの水を取り出し藤田に渡す。

木村「ほら、これ飲めよ。さっき買ったやつだから」

藤田「ありがとう」

木村、藤田の隣に座る。

藤田、水を飲む。

藤田3分の1ほど水を飲む。

藤田「ごめん、ありがとう。ちよつとそろそろ俺、行くわ」

木村「仕事？」

藤田のスマートフォンにメールの通知が来る。藤田、スマートフォンを見
る。

藤田「あ、やべ。そう、仕事。ありがとう」

木村「ちよつと待って」

木村、藤田の左手を掴み、スマートフォンを外す。外したスマートフォンを川に投げ捨てる。

藤田「お前、何やってんだよ」

木村「お前、仕事休め！」

木村、怒った顔。

藤田「は？お前何してくれてんだよ」

木村「とりあえず、飯食いに行くぞ」

木村、藤田の鞆を持って歩き出す。

藤田「お前、ちよっと待てよ」

木村「この近くに和田屋っていうめっちゃくち

ゃ美味しい定食屋があるんだよ。そこ行

くぞ。俺奢るから」

木村、走り出す。藤田後を追う。

○定食屋（朝）

和田屋と書かれた看板

○同店内（朝）

お客がひとりもいない。

木村、藤田が入ってくる。

店員の声「いらっしやい。お好きな席どう

ぞ」

店内にはラジオがかかっている。

藤田、木村席に着く。

木村「すいませーん。鍋焼きうどん2つください」

藤田「お前、勝手に」

木村「鍋焼きうどんがいちばん美味いんだよ。問答無用で」

店員の声「はい」

木村、机に置かれたガラスのコップにピッチャーから水を注ぐ。

木村「お前、ちゃんと飯食ってないだろ」

藤田「え？」

木村「生気が感じられないもん。最初見た時死ぬ前の俺のじいちゃん思い出したわ」

藤田、笑う。

店員鍋焼きうどんを二つ持ってくる。

店員「はい、鍋焼きうどん」

木村「相変わらず美味そう。いただきます」
木村、ガツガツと鍋焼きうどんを食べる。藤田一口食べて激しくむせる。

木村「お前、死ぬなよ」

藤田、笑う。

藤田「ごめん、久々にちゃんとした飯食ったから身体がびっくりしてるんだわ」

木村「どんな生活してるんだよ。ゆっくり食えよ」

藤田、木村黙々と鍋焼きうどんを食べる。

×××

鍋焼きうどんを食べ終わる。

木村「じゃあ銭湯でも行くか」

○銭湯外観

○同風呂内

銭湯に浸かっている2人。

藤田「はあー、風呂につかったの久しぶりだわ」

木村「お前、仕事順調？」

藤田「もうめっちゃくちやブラックだよ」

木村「お前はお前のままで十分だよ」

藤田「は？」

木村「渡辺商事の社員じゃない頃からお前を

知ってるけど、何も変わってない。有名

企業の社員でも、ただのお前でも何も変

わんないよ」

藤田「そうかな」

○橋の上（夕）

木村、藤田、向かい合って立っている。

木村「じゃあ、またな。体に気をつけろよ」

藤田「お母さんかよ。ありがとな」

藤田、木村お互いに背を向けて歩き出す。

木村「あ！藤田」

藤田「なに？」

木村、付けていたシルバーのハミルトンの腕時計を外す。

木村「これ、あげる。お前の時計、さつき川に捨てちゃったから」

藤田「でもお前それ、成人祝いに親からもらった大事なやつだろ」

木村「俺にはもう必要ないから。お前、ちゃんとこの時計の針に従って生活しろ。ちやんと一日3回飯食って、風呂に入って、夜になつたら寝ろ」

藤田「お母さんかよ」

木村、藤田に時計を押し付けて立ち去る。

○マンションの一室（朝）

藤田、リビングでドリッポコーヒーを淹れている。机の上にある木村からもらった時計を手にとる。

藤田「そういえば木村に仕事辞めたこと報告しないとな」

藤田、机の上のスマホを手に取り電話帳を開く。

藤田「あ、俺木村の連絡先知らないのか」

藤田、電話帳の「原田」のボタンをタップして電話をかける。コール音。

藤田「あ、原田？久しぶり。あのさ、木村の連絡先知らない？」

原田の声「え、お前聞いてないの？」

藤田「何を？」

原田の声「木村、2ヶ月前に亡くなったよ」

藤田「え？」

藤田、手に持っていた木村の時計を床に落とす。